

多奈川小島の人面岩

会員 武部正俊

① 盤座への興味

私は庭を作ることを生業として
いる。この仕事についてすでに45年
を過ぎようとしている。稼業でもな
く習ったわけでもない。偶然、当然
の成り行き、どちらをとってよいの
か分からないが、今では天職に恵ま
れたと思っている。突然この仕事を
始めたわけだから最初は何も知らな
かった。知識も技術もまるでない、
まさしくぶっつけ本番であった。仕
事を始めたころの憧れの人物は重森
三玲。独力で日本全国の庭園の実測
をし写真を撮り、文献を調べ上げ、

「日本庭園史図鑑」を書き上げ、そ
の後「日本庭園史大系」へと発展さ
せた。また創造性に満ちた石庭をた
くさん作り上げている。

日本庭園の石組は他に類例を見な
い独特のものではないかと思う。自
然石を使って、具象的あるいは抽象
的になにかを表現する。自然風景で
あったり、宗教的理想、あるいはい
かような解釈も可能な宇宙であった

りもする。重森三玲はこの日本庭園
独特の石組の源泉を「盤座」「磐境」
にとらえ、調査もしている。

私の作庭スタイルも最初重森三玲
のまねから始まったが、すぐに違和
感を感じた。思い悩んだ末、独自の
スタイルにいたった。庭園に対する
考え方も、重森三玲とずいぶん違っ
たものになってはきたが、重森三玲
を尊敬する気持ちは今も変わらない。

盤座への私の興味は、この仕事と
共に始まっていたが、特別に調べた
りもしていなかった。一昨年(20
08年)注目している若手建築家の
ブログからリンクをたどって、イワ
クラ学会会長の渡辺豊和氏のホーム
ページにたどり着いた。そこに「イ
ワクラサミット in 神戸」の案内を
見つけ、参加申し込みをした。そし
てやっと「盤座」なるものを目の当
たりにできた。目の前の岩石群が私
の中にあるなにか得体のしれない感
覚と共鳴するのを感じた。そしてす
ぐ「イワクラ学会」に入会した。そ

の後、機会を逃さないようにとの思
いで、盤座を見て回っている。

私は自身の作庭スタイルは、「ニ
ワ」(あえて漢字では書かない)に対
する考え方に基づいている。重森三
玲のスタイルとは今は全く違うと言
っていいだろう。でも石組が好きで、
どのようなシーンでも出来る限り
石を使うようにしている。またその
石を使う機会にも恵まれ、おそらく
今までに一万トン以上の石を扱って
きたと思う。今ではどのような石で
もその目的に従って組むことができ
ると自負している。私の扱ってきた
最大の石で25トンぐらいだろうか。
今は大型クレーンを使うから、人力
だけの時代に比べればずいぶん楽だ
ろう。それでも石を扱うのは大変で、
それらの石を組み合わせて、何らか
の表現をしようと思えばなお大変。
基本的な構想から材料の選択、現場
での実地作業。全てが自然石だから
同じものがない。寸法や形で計算づ
くで出来るものではない。経験と勘、

石に相對して自分の内部から湧き上がってくる何ものかがものをいう。考えすぎても駄目、考えなくても駄目。意識を自在にしておかないと、その場で対応できない。そして今、目の当たりにした盤座と何となく共鳴できる。

いつの時代にどのような人々がどのような目的を持って、このような石組を見つけたか、また組んだらしたのだろうか。数人で扱えそうな石から、想像を絶する巨大な岩もある。いろんな説はあるものの、その本質は計り知れない。私は、その存在理由を知りたいと思うより、多くの盤座に接して、その存在と共鳴して見たいと思っている。今も祭られ深く信仰されている盤座もあるが、忘れ去られジャングル化してしまった森の中でひっそりと、再び見だされることを待っているような「岩群」のあることを最近知った。

昨年（2009年）芦屋市奥池の施主宅の敷地内で不思議な岩群を見

つけた。施主宅は大阪湾を一望できる谷の上部に位置している。平らに造成された敷地からかなりな急勾配で谷側に落ち込んでいる部分まで施主の所有地。その一段下がったところに岩の頭は見えていたのでその存在は知っていた。周辺には樹木が生い茂り、その岩の全体像は分からなかった。樹木が成長して、海までの景観が見えづらくなってきたので、施主からの依頼で一部樹木の伐採作業をした。伐採によって新たにその全貌を頭わにした岩群は、とんでもない姿をしていた。（この岩群の報告は後日、もう少し周辺を含めて詳しく調べてからにしたいと思っ

る。）この岩群はまさしく盤座という名にふさわしいものだと思っ

た。事実、奥池周辺には有名な盤座がいくつもある。芦有道路へ向かう道路沿いにある「弁天岩」。ゴロゴロ岳の少し下がったところにある「剣岩」。六麓荘の最上部、芦屋大学の上にある「鏡

岩」。この岩群はこれらの盤座と何らかの関係があるのだろうか。また、施主宅の周辺の谷筋や尾根筋も、巨石がごろごろしている。これらの巨石は何を意味しているのだろうか。ただほとんどの岩群がジャングル化してしまつた樹木に覆われてしまつて、その姿をほとんど見ることができない。

ジャングル化してしまつた森の中に、ひっそりと再発見を待っている岩があるのではないだろうか、との思いで、そういう存在を探し始めた。仕事柄いろいろな場所の現場に向く。その途中で、こんなところに盤座があれば面白いなあ、と思う場所に出会う。そう思つてそういう場所をちらりと車窓に見ながら走っているとますますその感じが深まる。そう感じたら出来るだけそこに行つてみることにしている。私には霊感などといえるものは全くない。ただ何となくの直感だけだ。しかし行つてみると、ほとんどの場所で、盤座や

露岩、岩盤が見つかる。小さな祠や石仏を見つけることも少なくない。そういう場所の多くは、「カンナビ山」と呼ばれている比較的低い円錐形の綺麗な山であることが多い。そのような山があちこちにいっぱいある。大阪南部で今までに登つてみた「カンナビ山」と思われる山の頂上から大阪湾がよく見える。その山のどこかに盤座と思われる岩群や露岩、岩盤などが見つかる。大阪湾を廻る盤座があるのではないかと興味が高まり、機会があれば探りに行つている。まだ何のまともなものではない。まだ報告など出来る状態ではない。

そんな思いの中で、大阪府の最南西端の小さな岬で「人面」がいっぱい見える岸壁を見つけた。これが盤座といえるのかどうか、また信仰の対象になつているのかどうか、まだ調べてはいないが、とりあえずその存在を報告する。

②多奈川小島の人面岩探

索引

数年前から、和歌山県の北西の端
つこにある加太で仕事をしている。

友が島と淡路島を西に見る高台が現
場で、夕陽が落ちてゆく様はまさに
絶景だ。海拔50メートルばかりであ
ろうか、紀伊水道から大阪湾に出入
りする舟の全てを見ることができ

つまり軍事拠点としてもかなり重要
な場所であつたらう。事実この現場
のすぐ上には、高射砲台があつたよ
うでその基地跡が今も残っている。

ももある。また夕陽の落ちてゆく様は
古代へのロマンさえ感じさせてくれ
る。このあたりにきつと何かある。

盤座を見るようになってからその感
じをさらに深めていた。

この現場に通う時に気になる場所
がいくつかある。その一つが、大阪
府の最南西端、大阪湾に少し突き出
した「多奈川小島」。近くには閑空埋
め立て二期工事の際、土砂を積みだ

した栈橋があり、今は「とつと。パー
ク」という海釣り公園になっている。

地図で調べると、岬に「住吉神社」
がある。グーグル・アースの衛星写
真で調べてみると、岬の北側は絶壁
状で岩がごろごろしているように見
える。そして5月下旬やつと行つて
みた。

漁港独特の細い道を抜けると、右
手に住吉神社の階段が見え、左手に
漁港。その間の広場が駐車場になつ
ている。車を止めると、地元の管理
人らしい人が来たので「お宮さん
お参りに来ました。」と言うと「どう
ぞ。」という返事が返ってきた。釣り
客などの駐車は有料のようだ。

住吉神社の鳥居や階段は真新しい。
大手ゼネコンの寄進だったので、防
潮堤や閑空埋め立て工事の際に造ら
れたのかも知れない。神社や寺で近
年このように改造された様をよく見
かけるが、どこも作りがよくない。

機械切りされた中国産の石が多く使
われている。中国産の石が必ずしも

悪いとは思わないが、施工が粗雑な
ものが多い。昭和後期から平成時代
の経済オンリーの安直さ安つぽさが
目立ってどうも好きになれない。そ
の階段を上つて行くと、両脇にウバ
メ樫の太木がある。このあたりの山
はウバメ樫を主体とした常緑樹林が
多い。ウバメ樫は備長炭の材料とし
て定期的に伐採されるようなので、
あまり太いものは見かけない。しか
しここのは住吉神社の神域として伐
採されていないのか、太木が多い。

やはり大阪府の天然記念物に指定さ
れている。社は南向きに建っている。
神前に「二拝二拍手一拝」の挨拶を
してから、あたりを探索する。どこ
でも見かける案内板がないので祭神
など分からない。「住吉神社」とい
う社名だから底筒男命（そこつつのお
のみこと）、中筒男命（なかつつのお
のみこと）、表筒男命（うわつつのお
のみこと）の住吉三神が祭られてい
るのだろう。社の右側つまり東側に
回るとまだ新しそうな「多奈川龍神」

の石碑がある。その横に石の基壇に
二本の角柱を立て注連縄渡したもの
があつた。伊勢神宮の遙拝所かもし
れない。社の後ろ側は崖で海まで落
ち込んでいる。社の西側に回ると若
干広場状の部分はあるが、盤座のよ
うな石はない。太いウバメ樫などの
常緑樹が鬱蒼と生えている。東側の
崖部分から下に降りる。防潮堤が岬
に接しているところに出、さらに海
岸べりに降りる。岬の北側、絶壁部
分全体に簡易なフェンスをめぐるし
てあり、「立ち入り禁止」になつてい
る。崖崩れで危険とのこと。なるほ
ど崖下はグーグル・アースで見たよ
うに大小の岩石がゴロゴロしている。
満潮時らしく崖下まで潮が満ちてい
る。防潮堤の縁からだか様子がか
りづらいので、フェンスの間から
中に入ってみる。岬の岸壁をちよう
ど真東から見る。そこに見えたのは、
ギリシャ彫刻のような彫りの深い横
顔。まるでミケランジェロのダビデ
像の顔をゴツゴツさせたようなイメ

ージ。あまりにリアルな「人面岩」に感動し写真を撮る(写真I)。このような場所に人面岩があるということは聞いたことがない。

錯覚ではない。写真に撮ってもはつきりと人面に見える。満潮時なのでそれ以上近づくと危険に思われた。それで周辺を観察して見る。

盤座探索の時、私はその周辺に火を使った痕跡がないか調べることにしている。火を焚いた場所は、岩であれ土であれ、その部分の色が赤く変色する。岩や石、土の中にある鉄分がより酸化されてベンガラ色に変わる。一度変色すると、風化されてその部分がなくならない限り、その色が残っている。盤座探索をしながらまだ日は浅いが、かなりの確率でこの「赤変」が見つかる。この人面岩の周辺にもかなりの数の赤変が見つかった。単なる焚火跡かもしれないが、興味が増す。さらに探してみると、人の手が加わっている痕跡。特に人の手で掘られた穴や、筋を探



してみる。その掘られた跡をよく観察すると、古いものか新しいものか

おおよその推察ができる。ここでも水際の水平面に5か所の四角い穴の

あけられている岩があった(写真II)。このような四角な穴は岩を割る時の



矢穴としてよく見かけるが、ここのはどうも様子が違う。T字型に並べてあけられた穴は何を意味している

のだろうか。他に垂直面に彫られているのもあった。

写真Ⅱ

岬の西側にも回ってみる。ここも防潮堤のコンクリートの塊が岬にぶつかっている。東西からコンクリートに挟まれた状態になっている。防潮堤の外側には波消しブロック（テトラポット）がうずたかく積まれている。満潮時なので岬の崖部分には近づくことができない。防潮堤からは崖面が見えるが角度が悪くうまく観察することができない。テトラポットの上を歩いてゆくのは危険にも思えるが、若い頃夢中になっていたロック・クライミングを思い出しつつ、そろそろと伝ってゆく。テトラポットの端つこに行くと、岩の様子がよく分かる。そこから先ほどとは見え方の違う「人面岩」がある（写真Ⅲ）。東洋人がインディアンの横面をという感じ。東西両面から人面に見える岩。興味はますます深まる。

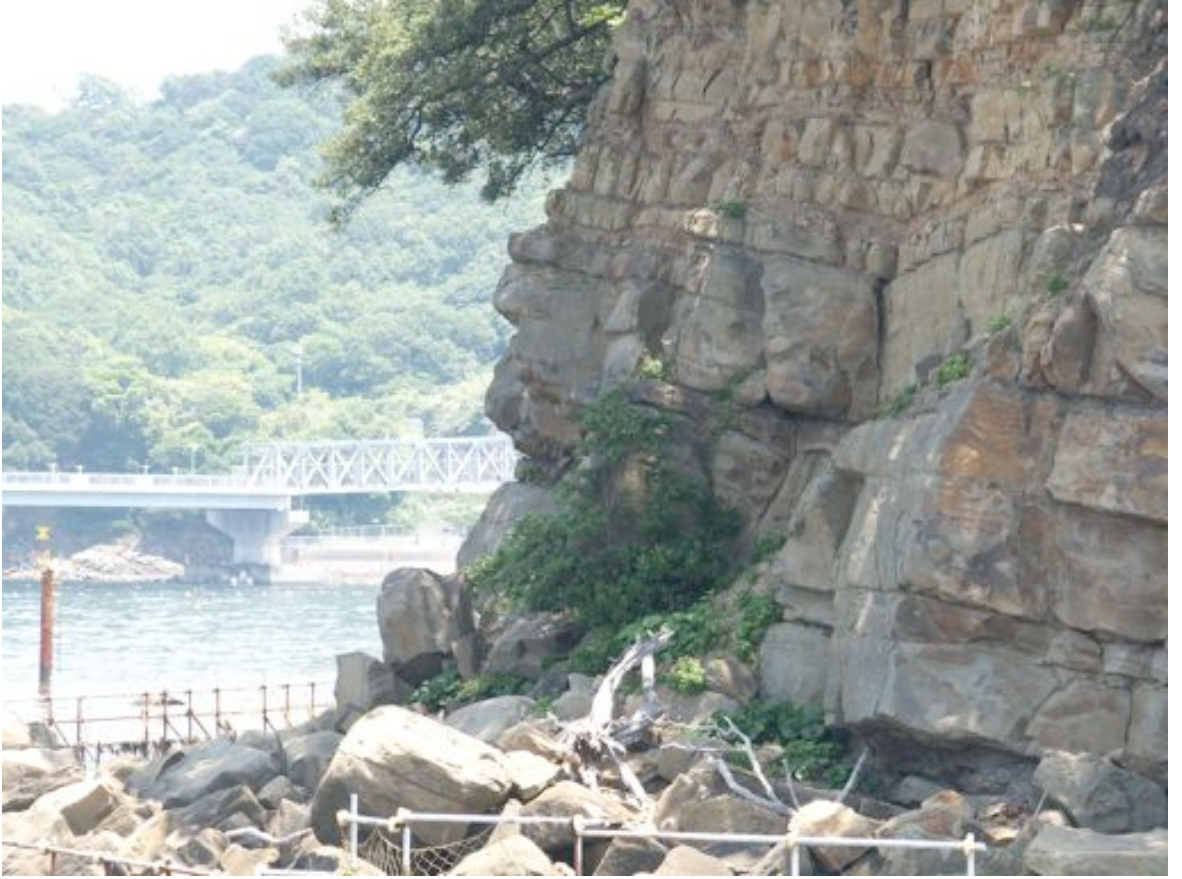
この岬は「天神岬」と呼ばれているらしい。先に書いたように、今、この岬は東西から防潮堤のコンクリートに挟ま

れている。防潮堤の前にはテトラポットが積まれている。人工物にがちがちに固められているので、景観はよくない。しかし岬の前面、つまり北側にはテトラポットはなく、その代わり海底に花崗岩のブロックが敷かれている。波による海底浸食をこの敷石によって防いでいるのである。まるで岬の「人面岩」に敬意を表しているように見え好ましく思った。干潮時にはこの敷石を伝って、岸壁を真正面から見ることができかもしれない。

③人面岩探索Ⅱ

7月初め再び多奈川小島を尋ねる

機会ができた。今度は干潮時を調べて行った。予測通り潮が引き、人面

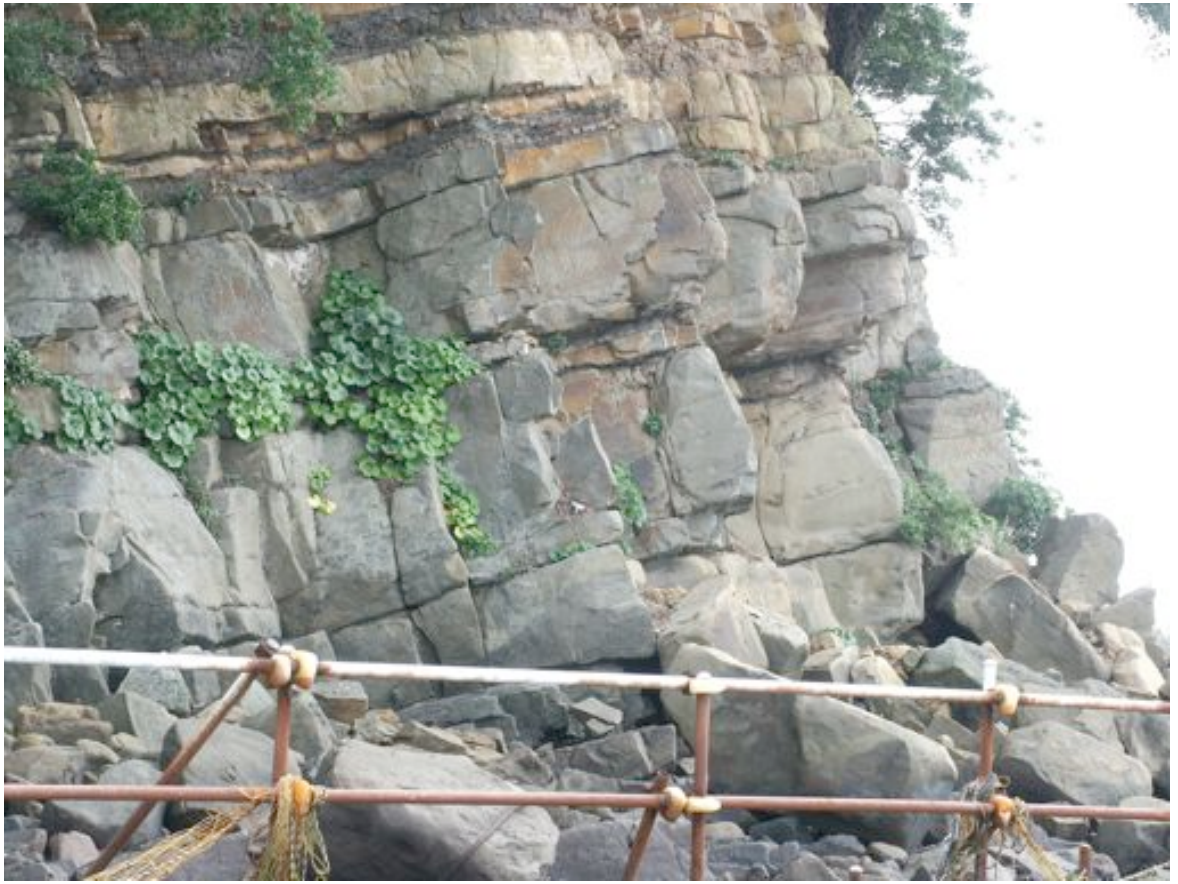


岩の前の敷石が水面の上に出ている。

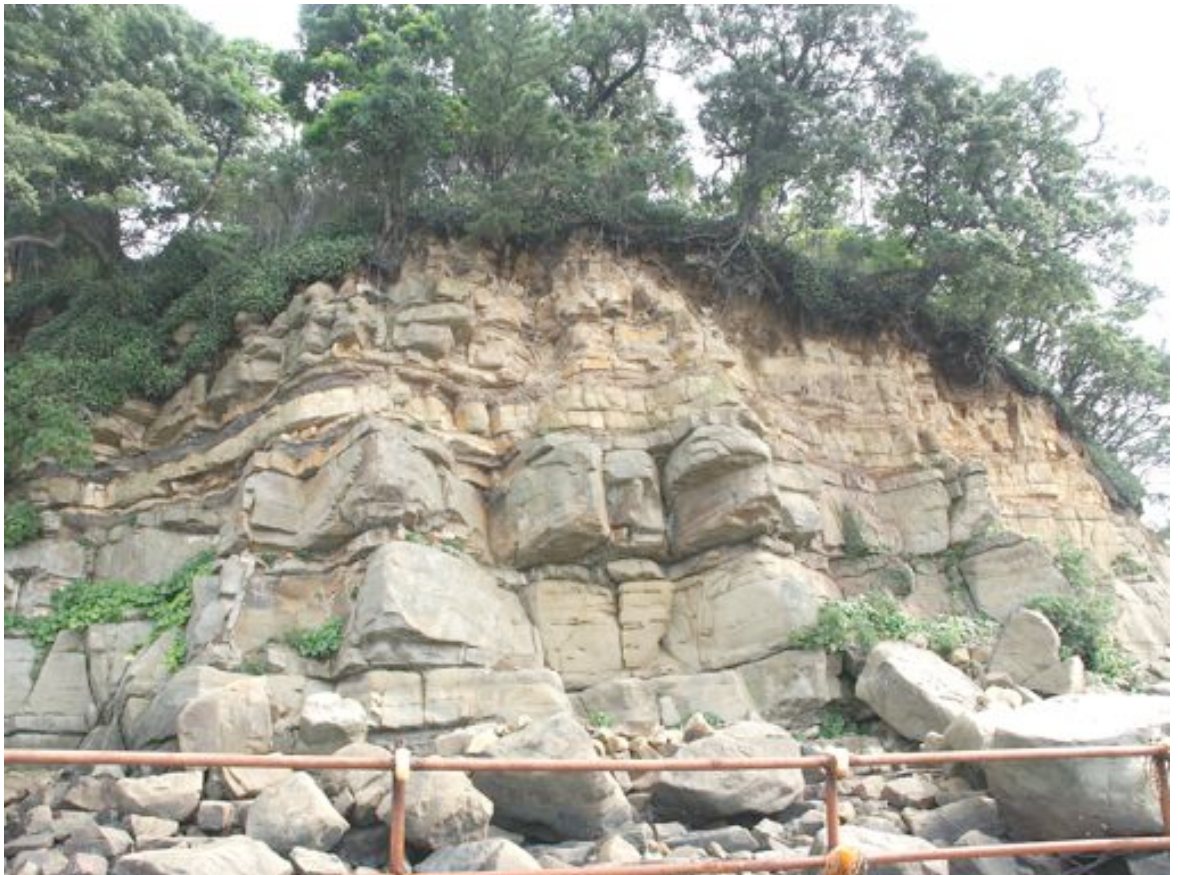
苔状に藻が生えている部分がありかなり滑りやすい。東側から前に見たダビデ風の横顔を見ながら岸壁の正面へと慎重に進む。進むに従ってその横顔の見え方が変わって行く。横顔が三つ並んでいるように見えるポイントがあった(写真Ⅳ)。岸壁の真正面に行くと突然横顔が消えた。岸壁全面が見渡せる(写真Ⅴ)。前面の斜め上の高い位置から見ると、正面から見る人面岩が確認できるかもしれないが、敷石上の低い位置からはまるでわからない。ただ岩のへこんだ部分の上の方に真正面を向いた彫りの深い小さい顔が確認できる(写真Ⅵ)。この顔は横側からは決して見ることができない。位置を変えてゆくとその顔の見え方がどんどん変化してゆく。別の顔が隠されたりもしている。まるでキュービズム彫刻を見ているよう(写真Ⅶ)。よく観察すると、顔に見える部分が沢山ある(その一つが写真Ⅷ)。まさに人面だらけ

の岸壁。

駐車場に戻って管理をしていた地元の女性に、写真を見せて人面岩について聞いてみたが、まるで認識していない様子。あんなにリアルに見える人面岩を地元の人たちは知らないのだろうか。住吉神社には一応社務所もあるが、人影はなくこの人面岩や祭神について尋ねることはできなかった。ウェブで検索してみたがほとんど何も分からない。興味だけがさらに深まって行く。



写真Ⅳ



写真Ⅴ
43



写真VI



写真VII
44



写真Ⅷ

④地層

多奈川小島は大阪府の南西端の位置にある。このあたりから加太にかけて、海岸線に沿って独特の地層がみられる。干潮時には「鬼の洗濯板」と呼ばれるギザギザの岩盤が現れる。また岬に多奈川小島と同じような絶壁が見られる所がる。砂岩と泥岩が交互に重なった地層で、北側が高く南側が幾分沈み込んでいる。この地層は四国北西部から和歌山県と大阪府の境にそびえる和泉山脈まで続いていて「和泉層群」と呼ばれている。中生代・白亜紀末期の堆積物の地層だそう。砂岩層は分厚く硬いが、泥岩層は薄くてもろい。それ故崩れやすいのだろう。泥岩層が深く崩れてゆくと、上の砂岩層がその重さに耐えきれなくなり崩れ落ちる。絶壁は北側に面し、層は北に高い構造だ。因果関係までうまく説明できないがこの構造が人面岩を形作るうえで何らかの関係があるのかもしれない。和泉層群の南側には中央構造線が

走っている。九州中央部を斜めに横切り、四国北部から近畿南部を東西に切り、中部地方でフォッサマグナとぶつかり、北上し諏訪湖に至る。

諏訪湖から関東を斜めに横切る。長い断層で、なぜか中央構造線沿いに聖地と呼ばれる場所が多い。また金、銀、水銀、銅、鉄の産地も多かったようだ。このあたりの問題は私にとってまだまだ未知の分野であるが、強い興味を持っている。

盤座と地質とに何らかの関係があるのだろうか。つまりは地球の構造そのものが、盤座に何らかのメッセージを込めているのだろうか。

⑤盤座と私

神の依り代としての盤座、この神はどこから来るのだろうか。天空からか、あるいは地中深くからか、水線。地平線の彼方からなのか。あるいは空間時間の概念など存在しない得体のしれない存在なのだろうか。依り代であれば、いつもそこにいる

のではなく、迎え、送るまでの間だけ依りつくのだろうか。私には靈感などまるでないし、「気」の流れを感じることができない。「オーラ」も見えない。盤座と相對するようになって気付いたことは、私が仕事としてなす「石組」はなぜか盤座と似ているということであった。もちろん規模も立地条件も違う。しかしなぜか、根底で共鳴し合うものがあるように思えてならない。

盤座がいつの時代からそこにあるのかも分からない。また盤座に類するものは世界中にあるらしい。おそらく科学的に精査したところで、多くのところは分からないままだろうと思う。分からないからいろんな推論が成り立つ。いろんな説が出てくる。それでよいと思う。わけがわからないから、盤座の作られた時代を「超古代」とでもしておこう。人がこの世に出現して以来という意味を込めて。

先に、根柢のところでも共鳴し合う

ものがあるように思えてならない、と書いた。私は自身の仕事である作庭について習ったことがない。したがって石組についても我流。なぜか石にひかれ石を多く使う。鳥は習わなくても種類に応じて巣を作る。「庭師鳥」のオスはメスを獲得するために、きわめて装飾的な庭のようなものを作る。これも習って作るものではない。私もそれと同じだろうか。自身の血の中にあるものが石組を通じて出てくるのだろうか。そして「超古代」とも響き合えるのであろうか。すでに還暦を過ぎて久しい。盤座に接するようになって、「超古代」と響き合える楽しみを得た。この感覚を大事にしながら盤座に接していきたいと思っている。

了